



四 大王、モーニングに行く

「ハヤテ。もう、起きたのか」

「学校のある日は遅いのに、休みになると起きるのが早いんだから」

パパとママはまだ眠たそうな顔をして二階から下りてきた。僕は慌てて、右手で胸ポケットを抑える。大王を隠すためだ。だけど、大王は指と指のすき間からパパやママを覗いている。

「うん。今日は、早く目が覚めたんだよ」

「もう、散歩にも行って来たぞ。早朝の新鮮な空気は気持ちよかったぞ」大王が続いてしゃべる。僕は慌てて大王を胸ポケットに押し込んだ。

「ほう。そうか。それはすごいじゃないか」

「どうせなら、学校のある日も同じように自分で起きて欲しいわね」

パパとママは大王には気がつかずに、顔を洗いに洗面所に行った。

「ダメじゃないか。パパやママに聞こえるだろ」

僕は胸ポケットの上から大王に文句を言う。

「休みだからといって寝過ぎるのはよくないんだ。人間の体はリズムが大切なんだ。リズムが狂うと、体調も崩れるぞ。そうすると、病気にもなるんだ。わしはお前たちのことを心配しているだけだ。もちろん、お前たちが病気になるとわたしたちも困るからな」

大王は何食わぬ顔で答える。確かに、大王の言うことはもっともだ。でも、パパやママに直接話をされるのは困る。大王のことが見つかってしまう。

「わかったよ。パパやママには僕から話すから、大王は黙っていてよ」大王に両手を合わせて頼んだ。

「まあ、お前がそこまで言うなら仕方がないな」

大王はふんぞりかえって、胸ポケットの中に座りこんだ。

「さあ、行くか」パパが玄関に向かう。

「どこに？」僕が尋ねる。

「久しぶりに、モーニングよ。あなたも行きたいと言っていたでしょう。さあ、着替えなさい」

パパやママはいつの間にか、もうお出かけの服装だ。それに比べて、僕はパジャマに毛が生えたような服のままだ。大人は動くまでは遅いけれど、動き出したら早い。急いで着替える。

「当然、わしも連れてってくれるよな」

大王がパジャマのポケットから顔を出した。

「うん。いいよ。でも、静かにしていてよ。それが条件だよ」

「もちろんだとも。任しといてくれ」人に頼むときは、笑顔になる大王。

僕はポロシャツを被ると、大王を胸ポケットに忍ばせた。運転はパパ。助手席にママ。僕は車の後部座席に乗り込んだ。

「どこへ行くんだ」胸ポケットの中の大王と目が合う。

「多分、商店街のコーヒー店。モーニングが食べられるんだ」

「おまえはコーヒーが飲めるのか。今まで、コーヒーにお目にかかった覚えはあまりないけれど

なあ」大王が首をかしげている。

「僕は飲まないよ。そこの店のコーヒーは他の店のコーヒーよりも濃くて、苦いんだ。だから、コーヒーの代わりにオレンジジュースにするんだ」

「オレンジジュースか。それなら覚えがある。他には何を食べるんだ？」

「トーストにジャムかバターを着けるかを選べるんだ。それで、値段は三百円」

「三百円か。このご時世にしては安いな。ファーストフード店やうどん屋並みだ」

「値段は安いけれど、コーヒーの味は本物だよ。パパやママはいつも美味しいって言っているよ」

「ふーん。それじゃあ、今日はコーヒーを頼んでくれ」大王が平然と言い放つ。

「えっ。コーヒー？」僕は聞き返した。

「わしもコーヒーを飲みたいんだ」大王が手を合わせている。似合わないかっこうだ。

「それはいいけど・・・」

僕もたまには家でコーヒーを飲む。飲むと言っても、パパやママが残したカップに口をつける程度だ。苦くて、とても飲めない。口をつけてはいつもペッペツとする。その後、冷蔵庫から麦茶や牛乳を取り出し、口直しをする。それなら、最初から飲まなければいいのだけれど、つい、大人がどんなものを飲んでいるのか試してみたいのだ。そんな訳だから、大王の希望にも応えたい反面、応えたくない気持ちもある。

「さあ、着いたぞ」車は百円パーキングに止まった。三十分百円だ。長くても一時間もいない。目的地の店まで商店街を歩く。朝の十時頃は、休みの日でも商店街の人通りはまだ少ない。近所に住んでいる人なのか、商店街のアーケードの下で散歩をしたり、ジョギングをしていたりしている。

目指すコーヒー店は商店街の中ほどにある。目立たないので、思わず通り過ぎてしまいそうだ。でも、店から流れてくるコーヒーの匂いで、多く的人是思わず立ち止まってしまう。その立ち止まった場所に、コーヒー色の木の看板があり、コーヒー色の木の階段を上っていく。そして、コーヒー色のドアを開けると、コーヒー色のカウンターとテーブルやイスが現れる。

「お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す」

女性店員さんは、はっきりした言葉だけど、なんだか少しイントネーションが違うあいさつをしてくれた。

「な・ん・に・ん？」

「三人」

「こ・ち・ら・へ・ど・う・ぞ」

店員さんが僕たちをテーブル席へ案内する。

「あの人、外国人？」パパの顔を見る。

「ああ、そうじゃないかな。顔つきからすると南米系かな。この街も国際化した証拠だよ。いいことだ。世界は広いけれど、狭いんだ」

「世界は広いけれど、狭いんだ」

僕はパパの言葉を繰り返す。でも、僕のお腹の中には、大王や王子がいる。世界は広いけれど、

人間のお腹の中もそれと同様に広いと思う。それにしても、店員さんはやはりコーヒーの国から来たんだろうか。それに、外国人の女性のお腹にも大王や王子がいるのだろうか。僕の疑問に大王が答えてくれた。

「当たり前だ。お前のパパやママはもちろん、日本人と言わず、外国人にだってお腹にはわしらの仲間がいるぞ。人間だけじゃない。犬や猫、セミやカマキリなど、生きている物には、全て、大王や王子、その部下たちがいるんだ」

「ふーん。そうなんだ」 そうだとすると外国人と言う言い方は変だ。日本人や外国人という区別をするのではなく、みんな命ある物と言った方がいいんだろうか。うんこ大王やおしっこ王子の仲間と言った方がいいのかもしれない。でも、女性のお腹の中いるのは、大王や王子じゃなくて、女王や王女なのだろうか。

「そうだな。会ってみたいな」 大王の顔が少し赤らんでいる。

そんな大王の姿を見て「へえ。大王でも照れるんだ」と僕は茶々を入れる。

「大人をからかうんじゃない」と大王は怒りだしたけれど、それは凶星の証拠だ。店員に案内された席に僕たちは座った。

「そうだな。コーヒーはブレンドで、パンはバターにしてくれ」 パパはそう言うと、いつの間にか、店の棚から持って来た新聞を開いた。「あたしはモカに、ジャムがいいわ」 ママも雑誌のページをめくっている。僕は、大王の希望どおりコーヒーを注文したいのだが、どれを選んでいいのかわからない。ええい、これだ。メニューの真ん中を指差した。

「キ・リ・マ・ン・ジ・ャ・ロ・で・す・ね。パ・ン・は・ジ・ャ・ム・に・し・ま・す・か、バ・タ・ー・に・し・ま・す・か」 店員さんの問い掛けに僕は「ジャムにしてください」と答えた。

「おっ。コーヒーを注文するのか」

「ちゃんと飲めるの」

パパとママが少し驚いて新聞等から目を離し、僕の方を見た。

「大丈夫だよ」

僕は周りを見た。お客さんは、ほとんどが高齢者、僕のおじいちゃんやおばあちゃんのような齢の人たちだ。それにお店とは顔なじみらしい。店にはいってくると、おはようと声を掛け、迷うことなく席に着く。席の場所も決まっているらしい。そして、店員さんが水を持って来ると、「いつもの」と言うと、持参した新聞や本を広げている。でも、お客さん同士は会話を交わさない。マスターや店員さんと、一言、二言、言葉を交わすだけだ。当然、あのおじいちゃんやおばあちゃんたちのお腹の中にも、うんこ大王やおしっこ王子たちがいるのだろうか。大王に尋ねてみる。

「もちろんだ。さっきも言ったように、全ての命ある物には、わしたち、うんこ大王やおしっこ王子たちがいるんだ。ただし、主たちが齢をとるように、わしたちも齢をとる」

「へえ、そうなんだ。じゃあ、あのおじいちゃんのお腹の中にいるのは、おじいちゃんうんこ大王やおじいちゃんおしっこ王子なの？大王はいいけど、おじいちゃんなのに王子だなんて変だね」

納得できるようで、納得できない。

「わたちは、主の食べ物や飲み物を消化し、栄養を吸収するのが仕事なんだ。呼ばれ方なんてどうでもいいことだ」大王が言い放つ。

確かに、大王の言う通りだ。僕と大王が話をしている間に、

「お・ま・た・せ・し・ま・し・た」と、店員さんがコーヒーとパンを運んできた。パパとママは、新聞や雑誌から目を離さずに、器用にコーヒーカップを持つと、口に運んだ。

「なんだ。野菜はないのか。野菜を食べないとんこが粘つくぞ」

大王が運ばれてきたモーニングセットを見て、顔をしかめる。

「だって、三百円だよ。これに野菜サラダがついたら、お店が儲からないよ」

「お店の経営のことを心配するのはいいけれど、自分の体のことをもっと心配した方がいいぞ」

「わかったよ。昼ごはんには、野菜を十分食べるよ」

僕はパパやママにならって、コーヒーカップに口をつけた、苦い。どうして大人はこんなものを美味しいと飲みたがるのだろう。やっぱり、僕にはオレンジジュースの方がいい。大王は僕のゆがんだ顔をじっと見つめながら、自分も飲みたそうな顔をしていた。

「王子。やっと食べ物が入ってきました。コーヒーです」隊長が王子に報告する。

「今日は、いつもよりも遅いなあ」待ちくたびれていた王子が立ち上がった。

「なにしろ、日曜日ですから。主は起きるのが遅くなり、その結果、朝食も遅くなります」

「まあ、体が動いていないから、そんなにエネルギーはいらないので、朝食が遅くてもいいけれど、本当は、毎日、規則正しく、食事をして欲しいなあ」

「そうですね。でも、脳や手、足なんかは、たまの休みぐらい、朝からドタバタしないで欲しいと言っています。それに、うちの隊員たちも、休みの日くらいはゆっくりしたいと願っています。何しろ、われわれは、二十四時間、三百六十五日、食べ物や飲み物の消化活動をしていますので、心も体も休まる日がありませんから」

「そりゃ、そうだな。休みの日くらい、あくせくせずに、のんびりするか。まずは、コーヒーの吸収だ。久しぶりのコーヒーだな。主はこんな苦いものをよく飲むよ。ペッペッ。何が美味しいんだろう。だけど、飲んだものは吸収しないわけにはいかないからな。まだ熱そうだから、やけどをしないように気を付けてくれよ。リキッド班」王子は隊員に声を掛ける。

「アイアイサー」リキッド班の隊員たちは耐熱服に着替えると、ホースを持ってコーヒーを吸収し始めた。

「王子。パンが流れてきました。イチゴジャムが付着しています」

「あっ。僕の大好物だ。固体班、しっかりと消化を頼むよ」固体班の隊員たちが、ツルハシにスコップなどを持って、流れてきたパンに飛びついた。隊員たちはすぐにパンを粉々にすると消化蓋に放り込んだ。

「なんだ。もう終了か」王子は、大王がいない間、自分が先頭に立って、頑張らないといけないと思っていたのに、隊員たちの作業がすぐに終わったので、拍子抜けだ。

「休みの日の朝食はこんなものです」

「ちょっと寂しいなあ。せめて野菜のサラダぐらいは欲しいなあ。まあいいか。そんなに体も動かないので、エネルギーも消費しないか。みんな、御苦労さま。昼食に備えて、ゆっくり休んでくれ。でも、昼食は少し期待したいな」

「アイアイサー」

固体班とリキッド班の隊員たちはその場に寝転んで、しばしの間、休憩態勢に入った。